## 「他の街の情報も必要です。海外で観光PRをするときに札幌だけじゃもったいないです」

国際プラザ勤務の国際交流員 韓国出身

**盧稀珍**(の・ひじん)さん

韓国出身。国際交流員として札幌国際プラザで外国人観光客に日々接する。日本在住歴は11年で日本語も堪能。最終的に住みたい場所は札幌。

ではありません。高いお金を払ってでも「おいしい物を食べてゆっくりしたい」と思う人たちもたくさんいるのに、もったいないことです。地元で素晴らしい企画がたくさんあるのに、うまく情報発信できていないと感じます。

**日色**　海外では、お金を掛けないでも楽しめたり、お金を掛ける場合には一流のサービスを受ける旅行をしています。札幌にもサービスの多様性や、ホスピタリティの多様性がもっと必要ですね。

**盧**　韓国から来ると、ツアー旅行の方が費用が掛かります。だから「観光は自分で回ろう」と思うのに情報がない。観光スポットの情報はあるのですが、それをつないだモデルコースがありません。

**日色**　個人旅行者向けに、地元発信のモデルコースは作るべきです。旅行の企画はこれから伸びる市場ですから、競争で良い企画がどんどんできてほしいですね。

**相馬**　モデルコースの一環と考えれば、観光スポットを回る「りんくるバス」の発想は良いと思います。

**吉村**　今後はツアーよりも個人のお客さまの方が増えると思います。そういうお客さまが満足できる環境をつくっていくことも大事ですね。

**伏島**　ツアーを離れた観光という意味では、今後リゾート都市としての可能性も見えてくるのではないでしょうか。

**吉村**　長期滞在はホームページの題材としても考えていることです。札幌には長く居て分かる良さがたくさんありますから。

### 札幌は北海道の玄関口

**伏島**　地元から札幌の魅力を伝えていくのに、効果的な方法はほかにもあるでしょうか。

**日色**　プロのタウンガイドの育成はどうでしょう。観光案内の技術だけではなく、「おもてなし」の心を育てる場をつくる。

**大滝**　やってみたいです。市民の中にも、観光にかかわってみたいと思う人はたくさんいると思います。

**吉村**　市民があこがれるような存在になってほしいですね。公的認定の資格を作るべきです。

**日色**　もう一つ。札幌は北海道の玄関口だという認識が必要だと思います。そこで提案したいのがアイヌ文化を意識することです。アイヌ民族は北海道のアイデンティティと言える存在です。極端に言えば、ハワイでフラダンスを踊って観光客を歓迎するように、千歳空港でアイヌの民俗舞踊を踊るという方法もあります。

**吉村**　特に外国からのお客さまはアイヌ民族について知りたがっています。

**伏島**　昨年は南区に「アイヌ文化交流センター」がオープンしましたし、アイヌ語の地名やその意味は残していくべきですね。

**盧**　私自身もよく知らないのでお客さまに説明できません。情報がなくてあきらめて帰る人もいます。もったいないですね。沖縄では琉球民俗の衣裳で出迎えてくれますが、ああいうのがあってもよいと思います。

**田崎**　北海道の玄関口として意識するなら、札幌を拠点とした北海道観光の可能性も広がります。札幌に連泊しながら小樽や支笏湖を観光する。札幌では「Kitara(キタラ)」で音楽、「芸術の森」で絵画や陶芸と。そういうやり方なら、ご年輩の方にも無理がない。

**相馬**　中高年層のお客さまのためには公共交通機関の整備も必要です。札幌・北海道は自家用車で移動することを前提に街が作られているように思います。ですが、観光に訪れる中高年層では公共交通が移動の手段ですから。

**盧**　韓国からのお客さまも観光するのは札幌以外という方が多いですね。海外で札幌市をPRするときは、他の街の説明もした方が良いと思います。

**伏島**　近隣の都市を含めた広域のPR活動が今後は必要ですね。

## 「地元で企画すればもっと良くなります。ここでしか味わえないツアーができるはずです」

バイリンガルフリーペーパー発行会社の代表

**日色無人**(ひいろ・むじん)さん

(有)ジーン代表。英語・日本語のバイリンガルフリーペーパー発行など積極的な国際化活動を展開。日本や海外の各地で居住経験がある。北海道が好きで札幌に移住。

平成15年にオープンした札幌市アイヌ文化交流センター



## 「格安ツアーのせいで『安いイメージ』がついてしまったら、北海道がかわいそうです」

「ようこそさっぽろ」HP運営メンバー・北海道東海大学国際文化学部助教授

**吉村卓也**(よしむら・たくや)さん

NPO法人「シビックメディア」で観光情報サイト「ようこそさっぽろ」を運営。96年に札幌に移住。札幌観光のHPを作成することで札幌を再発見中。

### 座長として今回の誌上ゼミナールを統括してみました

## 「いちげんさんじゃないお客さまを呼ぶという、高い目標を持って札幌を変えましょう」

NPO法人北海道観光バージョンアップ協議会副会長(前札幌国際大学観光学部教授)

**伏島信治**(ふせじま・しんじ)さん

「北のたびづくり検討委員会」委員長や「観光の苦情等に関する検討委員会」委員長などを務め、北海道の観光に造詣が深い。北海道が好きで札幌に移住。

学生に観光学を教えてきた私にとって、ゼミは市民の声・現場の声を聞く良い機会でした。出席者のうち私を含めて五人までが道外からの移住者です。活発な意見が多かったのは、思い入れがあってこの街に住むようになったからでしょうか。札幌観光は札幌だけでは完結しません。他地域を観光する人が多いのが実状です。討論会の中で、札幌は観光地ではないという厳しい意見もありました。ですから、札幌の観光の質を直視してお客さまを迎える職業意識を磨くとともに、今後は広域的なPR活動を考えるべきです。

それから、地元発信という点。ツアーの企画でも地元から外へ投げ掛ける動きに変えていかなければなりません。そのためには、長期的な視野で札幌の街をつくり直す必要があります。これは市主導で、行政の責任において進めるべきことですね。同時に市民や企業も同じターゲットを範ちゅうに入れ、それぞれの立場から街のつくり直しを進めていきましょう。訪れるお客さまは札幌に何を期待し、何を感じたいのか。私たちはこれをもっと意識しながら、札幌をデザインしていく必要があるのではないでしょうか。

札幌市も新年度から観光文化局の新設に伴って、ますます観光施策に力を入れると聞きます。今回の市民からのアイデアをぜひ生かしていただきたい。そして、関連業者並びにそこで働く方々に、ここで発信された思いが届くことを願います。